

[022]教育経営学研究紀要目次等

<https://hdl.handle.net/2324/5068296>

出版情報：教育経営学研究紀要. 22, 2021-03-26. The Laboratory of Educational Administration,
Educational Law Graduate School of Kyushu University

バージョン：

権利関係：

あとがき

研究室紀要第 22 号（通巻 30 号）が完成しましたので、ここに謹んでお届け致します。

本来であれば、一年前にお届けする予定でしたが、2019 年度末が突然に奪われ、作業が止まりました。学問の自由の根幹である「移動の自由」が奪われ、学会活動や調査研究もできなくなり、なにより海外との学术交流も見通しが立たなくなりました。教育行政学を専門としている立場としては、法的根拠を伴わない前首相の鶴の一声の「要請」で学校が突然に休校に追い込まれていく姿に無力感も覚えました。

2020 年度前期も日本一の広さを誇るキャンパスなのに「密」を避けるために学生・院生の立ち入りは一時禁じられ、2020 年度末となった今も「緊急事態宣言」の再発出（福岡県）もあって出校は奨励されておらず、廃墟となったようにひっそりしています。文理融合の学際大学院である人間環境学研究院の建物は例年ならば深夜まで賑やかで、早朝は館内の製図室前のソファで寝ている学生を見ながら出勤していたのですが、そうした「風物詩」にも出会わないままに、卒業研究や修士論文の提出も済んでしまいました。論文口述試験や大学院入試までオンラインとなり、教授会ははじめ諸会議も各自が研究室や在宅勤務場所からオンラインで無音、動画オフで繋がっているという風景が日常となりました。

「象徴的な舞台」としての大学キャンパスが封鎖され、2020 年度からの教育活動の場は一気にオンライン空間にとってかわられました。上半期はオンデマンド型教材づくりに翻弄され、手探りでオンライン教育を行っていましたが、下半期になるとそれも次第に慣れ、同期型オンラインによる新たな教育・研究活動のあり方を模索しているところです。

今春はこれまで研究室の中心を担ってくれていた 3 名、小林昇光さんが岡山理科大学に、木村栞太さんが九州共立大学に、鄭修娟さんが九州女子短期大学に就職されました。伊都キャンパスに移った頃は 10 名もいた博士後期課程の院生も一気に少なくなり、修士課程は 9 月の呉家揺さんの修了をもって不在となりました。コロナ禍だけの理由ではなく寂しくなってしまった研究室ですが、オンラインによる可能性も見出しています。おも研（卒論検討会）は年に 50 回を超え、週末にも開催できるようになりました。長崎県や熊本県など他県の教職員であるために研究室活動への参加には多くの負担を要していた社会人院生が日常的にオンラインで研究会に参加できるようになりました。水際対策で入国できずにいた研究生の張芸穎さんも国境を越えて参加できました。大学院のゼミでは「オーサービジット」と題して著者にお声がけし、快諾いただいたご本人を交えた学会誌論文の読書会を開催することもできています。これらは対面では実現できないことでした。学会の活動や海外との学术交流もオンラインによって時間と空間を超えた「移動の自由」を味わえるようになっていきます。巣立っていった OB・OG ともオンラインで繋がりを維持しています。

一斉休校要請の翌々日に予定していた盛大な歓送会も開けず、旅立ちを見送れなかった小林昇光さん、木村栞太さん、鄭修娟さんには引き続き本紀要の編集委員としてお世話になりました。柴田里彩さんは本紀要だけでなく日々研究室を切り盛りしてくれています。まだまだ不十分ですが、With コロナ時代の研究室活動と本紀要をご高覧いただき、ご指導ご鞭撻をよろしくお願い致します。

2021 年の早春 九大姪浜宿舎にて

教育法制研究室 教授 元兼 正浩